本書は小冊子ながら、桂川の問いに大黒屋の答える様子が生々しく記録され、例えば「其方共最初ニ着舩シタル所ハ何トカタルヤ」との問いに「アシシツカト申嶌へ漂着……」などの20を超える質疑応答が繰り返されています。この内容は桂川が後に体系づけて仕上げた大著『北槎聞略』とは異なり、尋問の場の臨場感が伝わってきます。ロシアからの初めての帰国者への尋問とあって、桂川が冒頭にいう「一大奇事」であり、将軍を筆頭に幕府内で関心が高かったことが伺えます。

本書は寛政五（1793）年に作られましたが、内容は幕府の機密事項であり、直ぐには広まらず、のちに書写され流布したものと推察されます。従って、本学所蔵本の書写年は寛政六（1794）年になっています。

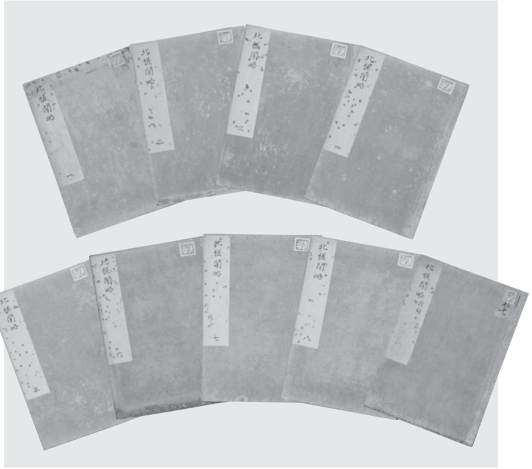
■大著『北槎聞略（ほくさぶんりゃく）』という書物

『北槎聞略』は、桂川が自分の研究として、尋問後に大黒屋を訪ね話し合う中で生まれた書物です。本書の記述は、大黒屋が伊勢の船頭で、天明二（1782）年に神昌丸で白子浜を出帆して難破し、仲間17名と共にアムチトカ島に漂着したことから始まります。その後、シベリアへ渡り、イルクーツクで出会ったキリル・ラクスマン教授の支援のもと、シベリアを横断して首都サンクトペテルブルクに向かい、生存者5名と共に女帝エカテリーナ2世に謁見して帰国の許可を得たこと。また、キリスト教へ改宗した2名を除き、大黒屋、磯吉、小市の3名が正式なロシア使節であるキリルの息子アダム・ラクスマンに伴われ根室に到着し、小市はここで病死したことなどが、ロシアの地誌と共に書かれています。

大黒屋が述べた漂流の顛末やロシア国内の風俗、物産、国制、軍事、文物、言語などについては、桂川が学者の観点から前述の『魯西亜志』などで補訂し、さらに体系付けて記述したものです。

本書は寛政六（1794）年に成稿し、幕府に献上されましたが、江戸時代の間は版本にはされず、その後のロシアとの交渉を意識した幕府の重要な情報源となりました。

本学図書館の所蔵本は、同年に書写されたもので、本文8冊と付録1冊から成り、紙質や筆跡などからして質の高い写本です。



桂川国瑞（甫周）〔編〕『北槎聞略』写本　寛政六（1794）年

■松平定信の蘭学観と桂川の著作

寛政の改革を主導した松平定信は、老中就任の当初から蘭学に警戒心を示し、寛政二（1790）年に蘭学を含めた異学を禁じています。そして、前途のように林子平の著述を否定しました。しかし、桂川の『新製地球萬国図説』など、蘭書からの翻訳書について、咎めることはありませんでした。

また、翻訳書『魯西亜志』についても、元々は大黒屋らの尋問のために作られた書物で、後に書写されて流布しても容認せざるを得なかったようです。

ここで、重要なことは、松平自身が優れた知識人であり、桂川の実弟で評判の高い蘭学者の